

「底が突き抜けた」時代の歩き方 308

自分の'失われた半身'^{カタワレ}を探し求める両性具有への旅

－ 映画『ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ』

ニューヨークのオフ・ブロードウェーで二年半以上に渡るロングランを記録したロックミュージカルがあった。マドンナは楽曲の権利取得を申し入れ、デヴィッド・ボウイはグラミー賞をすっぽかして観劇するほどの前評判で、ダニー・デヴィートは6度、グレン・クロウズは2度、他にヘザー・グラハム等が観劇に訪れている。そのミュージカルの名は『ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ』、ジョン・キャメロン・ミッチェルが主演した。映画『ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ』はそれの映画版であり、ジョン・キャメロン・ミッチェルが監督・脚本・主演を務め、舞台同様、作詞・作曲は私生活でもジョンの恋人だったスティーヴン・トラスクが担当した。

ヘドウィグは統一前の東ベルリンで、「ベルリンの壁」が築かれた年に米軍G Iとドイツ人女性との間にできた男の子ハンセルとして生まれる。母親と二人暮らしで、米軍用のラジオ番組から流れるロックを子守唄として育った彼は、いつしか自由の国アメリカに渡ってロックスターになることを夢見る。ある日、彼は厳格だった母親から「愛の起源」(プラトンの『饗宴』)についての物語を聞かされる。"人間はもともとは二つの体がくっついていたんだよ。二つの顔にそれぞれ二つの手足があって、二人で一人だったんだよ。ところが、力をつけた人々を恐れた神は地上に稲妻を放って、つながっていた人々の体を二つに引き裂いてしまった。それ以降、人間は寂しい二本足の生き物となり、失われたもう一つのカタワレを求めてさ迷うようになった。そしてそのカタワレに出会った時に芽生える感情、それが「愛」なんだよ "

この"失われたカタワレ"の物語は、その日から彼の心に深く棲みつく。ある日、一人の優しい米兵が彼の前に現れ、"君を愛している、結婚して壁を越え、自由の地アメリカに連れて行きたい"と囁きかけ、ロックスターの夢と"失われたカタワレ"の両方が叶うチャンスに舞い上がった彼は、なにかを得るためにはなにかを失わなければならないといわれて、米兵と結婚しアメリカに渡るために嫌々ながら性転換手術を受ける。しかし、手術ミスによって彼の股間に「怒りの一インチ(アングリーインチ)」が残されてしまう。この"アングリーインチ"の手術痕である男根を股に残したまま、彼は名前をヘドウィグに変えて「彼女」となり、晴れて渡米するが、米兵は当然ながら、女に成り損ねた彼の元から去っていく。ケーブルTVで「ベルリンの壁」が崩壊するシーンを見たヘドウィグは、自分の人生は終わったと感じる。だがどん底状態の中で、彼女は

ロックスターになる幼少時からの夢を思い起こして、カツラを手に韓国軍兵士の妻たち数人とロック・バンドを結成する。

片手間にベビシッターやアルバイトをこなし、田舎町のトレーラーハウスで生計をたてながら暮らすある日、17歳のロック少年トミーと出会う。ヘドウィグはロックスターになる自分と同じ夢を持つトミーに、すべての愛情とロックシンガーとしての魂を注ぎ込む。二人は最強の楽曲を作り上げるが、ヘドウィグがゲイであることを知ったトミーは彼女を捨てたばかりか、彼女のオリジナル曲すべてを盗んで、ビルボード№1のロックスターになってしまう。裏切られたヘドウィグは自らのバンド「アングリーインチ」を引き連れて、トミーの全米コンサートをしつこく追回し、大会場の脇の場末のレストランを巡業する。トミー側のガードは当然固いが、二人はトミーの豪華なストレッチ・リムジンの中で再会を果たす。トミーを前にヘドウィグの怒りは彼に向かわず、束の間のやわらかくやさしい時間が流れていく。

ストーリーは以上だが、金髪のカツラ、ピエロのような細い眉とつけまつ毛のドラッグ・クween、ド派手な女装姿は一見日本のビジュアル系の女装バンドに似ていなくはないが、ヘドウィグ自身の生い立ちを終始がんがん鳴り響くロックのリズムに乗って歌いまくるド迫力と痛切感が奇矯な女装姿とピタッと融合している点が決定的に異なる。ヘドウィグは舞台上でロックを歌っているのではなく、自分の人生をロックで歌い、演じているのだ。つまり、ヘドウィグはどこでも自分自身を歌っていかなければならない舞台を、自分の中に用意している。面白いのは、彼の歌を聞く客たちは彼らが全く望んでいない歌を、突き刺すように聞かされねばならないことだ。だから、彼女の歌はいつまでも彼らに受け入れられなかった。しかし、客に受けようと受けまいと、彼女は自分自身を歌っていかなざるをえない思いに溢れ返っていた。

主人公が性転換手術のミスによって股間に一インチほどの傷跡が残ってしまったことと、自分の「失われたカタワレ」を探し求める旅とは、もちろん別個の問題ではない。主人公は東ドイツで生まれたとき、ハンセルという男の子であった。ゲイにとっては東で生まれるのと西で生まれるのとでは、天と地ほどの差があった。もちろん、西であろうと東であろうと、ゲイが周囲の差別的な視線に晒されて生き難く感じられる点では変わらないが、西では曲がりなりにもゲイとして生きていくことができるのに対して、東ではゲイであることを隠さなければならない。人間としては認められないからだ。主人公はそんな国でゲイとして生まれたのである。ゲイであること、ロックスターを夢みること、この二つの生存の与件が抑圧されるところでは主人公は生きる意欲を持てなかった。

主人公はゲイとして生きられ、ロックスターの夢を叶える可能性が拓かれているアメリカに渡るという願望をいつしか胸中に潜ませる。母親から聞かされた「失われたカタワレ」を探し求める「愛の起源」の神話は、ほかの誰かと出会うことで自分が完全なものになりたいという欲求をもつどの人間にとっても、心地よいファンタジーにほかならなかったが、ゲイとして自らの性を抑圧されている主人公にとっては、とりわけその「愛

の起源」は切実なものであったにちがいない。ゲイである自分のもう一人の「カタワレ」を探し求める旅は、異性愛者のその旅以上に条件的にかなり厳しく困難であるが故に、ファンタジーの付け入る隙もないほどに現実的であらざるをえなかった。思春期で揺れている主人公の前にアメリカ人兵士が現れて、結婚してアメリカに行こうとやさしく誘ってくれる甘い囁きが、したがって自分の夢のすべてを叶えてくれる福音として主人公に受けとめられるのは当然であった。

しかし、甘い囁きにはいつだって危険な罠が待ち受けている。そう話がうまくいく筈がないと誰でも思うし、実際その後の経過を一瞥しても、案の定悲嘆に暮れるというのが落ちである。舞い上がった分、叩きつけられる衝撃も大きい。主人公は性転換手術によってハンセルからヘドウィグに変貌しようとするが、手術ミスによって「アングリーインチ」が股間に残ってしまう。当然、結婚の夢は破れ、奈落の底に突き落とされるが、問題はこの最初の躓きがヘドウィグにとって何を意味していたかである。いうまでもなく「アングリーインチ」は、ヘドウィグの前身である東ドイツのハンセルを象徴していた筈だ。東ドイツからアメリカへ、ハンセルからヘドウィグへ、人は何の屈託もなく別人に変わる筈がないということと、「アングリーインチ」は示唆していたにちがいない。

おそらくアメリカ人兵士の甘い囁きにはなんの落ち度もなかった。手落ちは主人公のほうにあった筈だ。東ドイツのハンセルからアメリカのヘドウィグへと跨ぎ越すそこには、けっして跨ぎ越すことのできない深淵が横たわっているのに、主人公はその深淵こそを跨ぎ越そうとしたのである。あたかも古い上着を脱ぎ捨てて新しい上着に替えるように、東ドイツを出てアメリカに行くために性転換手術をしまえば、全く新しいもう一人の自分がそこに誕生すると思い込んでいたのだ。つまり、過去の自分はすべて葬り去ることができると思っていた。ところが、どっこい、そうは問屋が卸さなかった。アメリカのヘドウィグのなかから東ドイツのハンセルを消去することはできなかった。しかし、ヘドウィグは自分の中から東ドイツのハンセルをこそ消去したかった筈だ。東ドイツのハンセルには自分の夢が詰まっていなかったからだ。だが消去できないものを消去しようとしたとき、当然消去できないものから反撃を食らわずにはおれなかった。それが「アングリーインチ」であった。

そうみると、ヘドウィグの股間に残っている「アングリーインチ」とは単なる性転換手術のミスによるものであるよりも、性転換手術と同時に心の転換手術も意図していた主人公のマインドミスが、「アングリーインチ」の具体的なかたちをとって姿をあらわしたものと考えられるかもしれない。失意の底に沈んでいるヘドウィグがアメリカの地で、テレビに映しだされた「ベルリンの壁」の崩壊と、歓喜する人々の乱舞をみて、自分の人生は終わったと感じたのはもちろん、「ベルリンの壁」の崩壊が性転換手術を受けて結婚するためにアメリカへやってきた自分の試みを、すべて無に帰するように思われたからだ。ここでもヘドウィグは目にみえる壁は崩壊しても、人々の心の中に深く張りめぐらされている壁は瞬時に崩壊するわけではないことを知らなかった。「アングリ

ーインチ」は人々の心の股間にまだ残されていることを。

他人に対する甘さではなく、自分に対する甘さが是正されていくためにも、人は失意の底でのたうちまわらなければならなかった。失意が深ければ深いほど、起ち上がりも大きかった。ヘドウィグはかろうじて自分に残されているのがロックスターの夢であることを改めて思い起こし、その夢にむかって突き進みながら自分のやりたいことをやるなかで自分の「カタワレ」を探していく。人は探し求める旅をやめないかぎり、もう一人の自分のようにして相手が必ず目の前に登場するようになっている。かつてのアメリカ人兵士がそうであった。ロックスターを歩むヘドウィグの前に現れるのは、少年トミーである。結局、トミーにもヘドウィグは裏切られるが、それは自分が自分を裏切っていく旅に等しかった。アメリカ兵であれ、トミーであれ、彼らを自分のもう一人の「カタワレ」として愛そうとしたのはヘドウィグであって、彼らはヘドウィグに愛され拘束されるために存在しているわけではなかったからだ。

トミーに裏切られて、彼をしつこく追い回し、彼に出会って言葉を交わすうちに、それまでの怒りが収まっていくのは、ヘドウィグが自分の目の前にもう一人の「カタワレ」としてのトミーではなく、トミー自身としてのトミーを見出したからだ。このときヘドウィグは、自分が出会う相手のなかに自分の「カタワレ」を探し求めることの不可能性に気づいたのである。自分の旅の外で生きている相手に触れたのだ。映画のラスト、カツラを取ってメイクを落とし、一人で歩いていくヘドウィグが映しだされる。自分の「カタワレ」を探す旅は、自分のなかに向かっていく以外にないことを知るのである。これまで何度も自分の行く手に立ち塞がってきた「アングリーインチ」こそが、自分の「カタワレ」かもしれないと思うようになる筈だ。

映画は、ゲイであることが男でもなければ女でもない中途半端な性であるという見方から、男でもあり女でもあるという両性具有の見方へと単に反転させていったストーリーではなく、中途半端な性としか受けとめられないゲイが何度も挫折しながら、ゲイとしての自分の性をそのまま抱え込んで生きることを余儀なくされるプロセスを描きだしている。自分が意図し目指した通りに歩いていったら、自分の王国に行き着いたというわけではなく、何度も自分が押し潰されるなかから、その底に沈んでいる自分を拾い上げていくと、いつのまにか自分に馴染んでいる自分に出会っていたという風情である。つまり、自分の「カタワレ」はどこか遠くにいる他人ではなく、遠くにいる自分であって、何度も挫折を繰り返すうちに、自分のほうから遠くの自分へ近寄り、そして遠くの自分がこちらの自分めざして歩いてきたといった感じなのだ。

自分が引き裂かれて生まれてきたと意識するから、どこかにいる自分の「失われたカタワレ」を探し求める気持が強くなってくのではない。たぶん逆である。自我が芽生えたとき、人は誰でも世界における孤立感のなかで欠損感覚を抱え込んでいる。いいかえれば、自分が自分であることに到底充足しえないのだ。欠損感覚はいまここにいる自分とは異なる自分を捜し求める旅へと自分を駆り立てて止まなくなる。自分探しの旅は、

自分が一体、なにものであるか、という問いが底流するなかからたえず湧き上がってくる。ゲイの人たちがもし多数の異性愛者よりも自分探しの欲求が強いとするなら、それはその欲求に性的な比重が深刻に押し掛かってくるからだと思われる。

02.5.30付の朝日新聞には、「第三者からの精子提供による人工授精（AID）で生まれた」子供たちの父親捜しの旅が報告されている。父との疎隔感から自分の本当の父親はどこかにいると思い続け、やがて事実を知ったときにほとんどの場合、精子提供者（ドナー）である父親を捜す旅に赴くのは、もちろん父親捜しの旅が自分捜しの旅にほかならないからである。自分は一体誰かという問いは、まず自分は誰から生まれてきたのかという問いのかたちをとって訪れてくる。自分がいまここにこうして存在している根拠に結びつくものを、どんなかたちでもいいから、どんなわずかな手がかりでもいいから、手に入れようと願うのは、我々があまりにも自身の存在の根拠の不安に満ち満ちているからにほかならない。新聞記事が父親捜しの旅に出かけて、見つけながらも会わずに帰ってくるのも、そしてそのことで落ち着きを取り戻すのも、父親がどんな人であれ、そこにいるということが不安をいくらかでも和らげてくれるからだ。

映画『ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ』は、自分探しの旅が自分以外の他者探しの旅でもあることを控えめに示唆してくれている。要するに、自らの欠損感覚を充足させるために相手を必要とする付き合いかたは永續きしないということだ。寂しさを紛らわせるために人と付き合っても、寂しさは軽減されるどころか、増幅するばかりである。なぜなら、相手は自分の寂しさを埋めるために付き合っているわけではないし、本来自分の寂しさは自分で埋めるしかないからだ。つまり、自分の内なる寂しさは外との関係で補うことはできず、内なる欠損は内に湧きでるものによってしか満たすことはできない。したがって、自分自身に対する関係がうまくいかないときは、必ず他人（相手）との関係もうまくいかない。自分自身に対する欠損感覚が他人との関係にどうしても投影されてしまうからだ。

ヘドウィグは相手に求めていく関係がどれほど自分にとっても相手にとってもしんどいか、それ故に衝突を繰り返すことになるかが、ようやくわかったのである。自分探しの旅は自分の内部の欠損に向かわなければならないことを覚ったのだ。このときヘドウィグは、自分自身を引き受ける覚悟を持ったにちがいない。ヘドウィグが今後どんな相手ともどのように付き合っていくかは、充分想像できる。自分を自分に返し、相手を相手に返していく付き合い方が展開されると思われるが、しかし、それは相手を突き放すことでもなければ、自分に踏み込まれないために相手に踏み込まないようにするということでもない。おそらく自分を自分に返すことによって自分を充実させ、相手を相手に返すことによって相手を充実させることになる筈であり、自分も相手も全体的になろうとするなかでの関係がヘドウィグによって示唆されていると受けとめられる。

2002年6月8日記